

アゲハチョウの成長

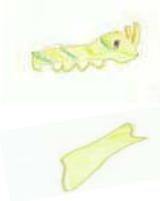
江東区立みどり幼稚園（東京都江東区）

[5歳児]

ミカンの木にアゲハチョウの卵を見つけた保育者は、卵(5~6個)を産みつけてあるミカンの葉を飼育ケースの中に入れ、保育室の真ん中の子どもたちの見やすい場所に設置しておく。<2年保育5歳 6~7月>

子どもたちに卵からアゲハチョウになる姿を見せてあげたい。



幼児の姿	保育者の援助・環境構成
<p style="text-align: center;">茶文字・科学する心のとらえ</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">卵を見て</p> <p>①「何、これ？」と飼育ケースの葉っぱを見て言う。 感じる</p> <p style="text-align: center;">卵がかえって</p> <p>③なかなか成長しない幼虫を見て「変わってないじゃん」と言う。 見つめる</p> <p>⑤「大きくなってる」の声に数名の子が寄ってくる。</p> <p style="text-align: center;">アオムシになって</p> <p>⑦「あ、アオムシだ」「葉っぱをたくさん食べてるね」 対象に働きかける</p> <p>⑨「ミカンの葉っぱ、採ってきてあげよ」と採ってくる。 対象に働きかける</p> <p>⑪「この子は怒りんぼだね。頭に触るとツノを出すよ」 対象に働きかける</p> <p style="text-align: center;">数日後、サナギになって</p> <p>⑬「サナギになってる」の声に次々とケースをのぞき込み、「本当だ。サナギだ!」と言う。 見つめる</p> <p>⑮日がたつにつれて変化のないサナギに対して、興味が薄くなっていく。</p>	<p style="text-align: center;">保育者の援助・環境構成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・“むしのけんきゅうじょ”の看板をつけ、子どもたちが“むし”をいつでも見やすいように場を設けておく。 ・虫眼鏡、虫に関する本や図鑑、霧吹きなどを用意しておく。 ・子どもたちのつぶやき(気付いたこと)をいつでも受け止め、みんなに知らせるようにする。(新聞にしていく) ②「何だろうね。今は卵だけど毎日見ると変身していくよ」と期待をもたせる。 ④「葉っぱを食べた跡があるよ」「少し大きくなったみたい」と虫の変化を声に出して伝えていく。 ⑥「本当だ。よく気付いたね」と気づきに共感する。 ⑧「たいへん、たいへん。アオムシのごはんのミカンの葉っぱがないわ!」と周囲の子どもたちに聞こえるように言う。 ⑩「たくさん食べて大きくなったね」 ⑫「霧吹きをアオムシにかけたらツノを出したよ」 ⑭「蝶になる準備をしているんだね」 ⑯サナギの絵を描き「サナギの中で何をしているか?」と尋ねる機会をつくる <div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center;">  </div>

環境・援助のポイント

興味を引き出す

興味を追求できるようにする

自分の考えに自信がもてるようにする

関心を引き出す

関心を引き出す

期待をもてるようにする

関心をもてるようにする

実際に見て感じられるようにする

関心を引き出す
特性に気付かせる

不思議さを感じられるようにする

期待がもてるようにする

予想する楽しさを感じられるようにする

考察 ・保育者自身がアゲハの成長を見つめ、気づき・発見・感動したことを子どもたちに発信してきたことで、無関心だった子どもたちが自然に関心をもって見るようになってきたと考える。

・子どもの感動を実感できず表面的にかかわる傾向にあった保育者が、子どもの視線に合わせて対象を見つめてきたことで、気づき・発見することの楽しさに共感していくことができた。

・幼児一人ひとりのありのままの思いを肯定的に受け止め、発言することの楽しさが感じられるよう援助することで、興味が深まり、自分の考えに自信がもてるようになってきたと考える。また、幼児同士が自分の思いを表現するようになり、自分にない考え・思いもよらぬ考えに気付かされたり、新鮮な驚きに会ったりして子ども同士で気づき合いを楽しめるようになった。 [援助]

2週間ほどたったある日

朝、登園してきた子が「先生、アゲハチョウになってる！」と知らせに来る。その子なりのつぶやきがたくさん聞こえる。



子ども同士の話し合いの結果、アゲハチョウを逃がすことになった。

その5日後

次々とアゲハチョウが誕生し、名前をつけて戸外に放した。



考察 ・アゲハの成長を見つめられるようにしてきたことで、生命の神秘・不思議・生き物の一生に気付くことができた。生命あるものの扱いや愛おしむ気持ちが育まれてきている。

・自然との出会いの時期を逃さず、教材準備をしていくことで子ども自らが自然とのかかわりを深めたり、広めたりすることができた。個々の興味が追求できるよう環境を整えていくことが大切である。

環境・援助

みどころ

子どもの言葉や行動を分析することで、当初は「感じる」「見つめる」「対象にかかわる」姿であった子どもたちが、「見立てる」「考え判断する」「表現する」「探求する」ようになり「科学する心」が育まれたことがわかります。また同様に、その時の援助や環境を分析することで得られた「科学する心」を育む保育の手掛かりは、今後の展開でも活かされることが期待できます。